つぶやき

学校図書館と生徒たち、コロナ禍のいま

東京都高等学校教職員組合　伊井 淳子

2020年２月末、突然の全国一斉臨時休校要請があった。6月、ようやく学校が正式再開。本校はクラスを二分し、分散登校が行われた。生徒たちの心情は複雑だったと思う。学校図書館では常連の生徒が顔を見せ始める一方で、これまであまり来なかった生徒も見かけるようになった。その中に賑やかなＸ君とＹ君がいた。司書としては利用者が増えるのは嬉しい。しかし彼らは毎日、いつも大声で喋っていた。図書館には一人の時間を持ちたい生徒、勉強している生徒、静かに読書している生徒もいる。彼らは大声を止めるよう注意しても改めないばかりか、ついに一人の生徒へ向かって暴言を浴びせた。その生徒Ｚ君は、それ以降来館しなくなった。Ｚ君はこれまでも度々保健室へ行くこともあったので、養護教諭、担任と相談を重ね、学年が動いて、Ｘ君とＹ君は当分の間、来館禁止になった。数日後、Ｚ君が図書館にやってきたときは、ほっとした。けれども、もちろんそれで全てが解決したわけではない。

休校や分散登校、行事の中止が相次ぎ、生徒のメンタル面のケアも大変になっている。読書には、心を豊かにし、人を元気づける力がある。図書館は一人一人が癒され、活力を見いだせる場所でありたい。しかしその環境作りが、時として予想以上に難しい。さまざまな状況に対応するための校内の連携は欠かせない。

日常的に図書館に居て、生徒に本の話をする。生徒からも「この本面白いから読んで！」と言われ、その後さらりと感想を言い合う。いい時間だと思う。

この数年、図書委員会主催の校内ビブリオバトル大会を行っている。昨年度は過去５年間の中で最も参加者が多く、盛況だった。本の紹介は「自分」の紹介に繋がることがある。読書は自己を見つめ、主体的に動く力を養ってくれる。こんなご時世だからなおのこと、学校図書館を利用して、10代の今から読書する習慣を身につけてほしいと思う。